

10・8羽田闘争と山崎博昭の死

50年前の1967年10月8日、ベトナム反戦デモに参加していた京都大学文学部1年、山崎博昭さん（当時18歳）が、羽田空港近くの弁天橋で機動隊と衝突し命を落とした。いわゆる「第1次羽田闘争」の中での出来事だった。今夏から秋にかけて、大阪や東京で彼の死や闘争の意味を見つめ直す集会が開かれた。企画したのは「10・8 山崎博昭プロジェクト」。この時代に青春を送り闘争に関わった人たちの胸底にうずくまるものとは。プロジェクト発起人の一人で反原発運動にも奔走する水戸喜世子さん（82）＝大阪府高槻市＝は「彼の死の意味、反戦・平和運動のあり方を絶えず自問している」と語るのだ。【有本忠浩】

ベトナム反戦デモの「第1次羽田闘争」や、闘争に参加し18歳の命を奪われた山崎博昭さんについて語る水戸喜世子さん＝大阪府高槻市で、有本忠浩撮影



技術者から記者へ 私の転機



一般社団法人
大阪自由大学理
事長でジャーナ
リスト、池田知
隆さん(68)＝写
真＝も『10・8 ショック』が人生の分かれ道だった」と語る。熊本出身。18歳時に福岡県大牟田市の国立有明高専(5年制)

鋭く、すごい人間が同世代にいると描きふられた。そして、「彼の死から私は変わりだした」と言い切ってもいい。その年(67年)の冬、パスポートを取り、1週間ほど沖縄を巡った。「いつしか技術者の道から外れ新聞記者を目指した」新聞社を退職後、大阪市内で

大阪自由大学理事長・ジャーナリスト 池田知隆さん

の4年。秋には学生会長になった。「高専で学ぶうち産業界の要請による人間ロボットの生産工場ではないか、と学校や社会への疑問を募らせた」そんな時だった。国語の恩師(故・棚町知弥さん)が、「山崎博昭君の日記」を掲載した週刊誌の記事を抜き書きしたガリ版刷りを配布。「彼がデモに参加する時に持っていたマルクス、キルケゴールらの書名に圧倒された。社会に向ける目線も

2012年から大阪自由大学の企画運営に携わる。多彩な公開講座(文学、芸能、映画)など社会問題を考える場作りに尽くす。今年中に恩師の評伝を書く予定。山崎プロジェクトの3事業にも全て関わり今夏のベトナム行きにも参加。「彼の死の意味をどう受け継ぐか。自分の中で真摯に純粋に守るべきものを守るといふ信念だけは忘れないでいたい」と語る。

ベトナム反戦デモ 学生が犠牲に



「第1次羽田闘争」は、ベトナム戦争が終る中で佐藤栄作首相が羽田空港から南ベトナム(ベトナム共和国)へ向

水戸さんは、お茶の水女子大で物理学を学んでいた頃、東京大大学院1年で放射線物理学を学んでいた。歳さんと出会ったのは1960年に結婚。関西に移住し、夫は甲南大の物理学の専任講師、喜世子さんは京都大基礎物理学研究所で所長だったノーベル物理学賞受賞者、湯川秀樹博士の秘書を務めた。「博士は長女の誕生の名付け親。『水晶』のような無垢な輝きを、と願って

不穏な時代ただす礎

かつてを学生らが阻止しようとした運動だ。学生に圧倒的な人気を誇った作家、高橋

ださったと懐かしむ。夫婦はその後、日韓基本条約反対闘争、ベトナム反戦運動、沖縄・安保闘争などに携わり、歳さんは70年代からの反原発運動の理論的支柱でもあった。



今年6月、東京都大田区の福泉寺に建立された山崎さんの墓。10・8 山崎博昭プロジェクト提供

を展示③追悼記念本『かつて10・8羽田闘争があった』(台同フォレスト)の刊行。いずれも今年発売された。追悼記念本には彼の死の検証記事に加え、高校の同窓会で元東大共闘議長・科学史家の山本義隆さん、同高の同期で詩人の佐々木幹郎さんら11人の寄稿を掲載。時代の貴重な証言記録になっている。

2人は、山崎さんらデモや集会その犠牲者らを物心面面で支える「羽田救援会」を67年に設立(現在は「救援連絡センター」)。東京都港区に改組し、水戸さんが初代事務局長に。「手弁当で運動や

プロジェクト呼びかけ人の

支援に忙殺される日々だった生活が暗転したのが86年12月。歳さんと、長女の二つ下だった双子の兄弟(兄・共生さん、弟・徹さん)当時24歳)の3人が北アルプスの剣岳で遭難し全員が帰らぬ人。兄弟は、両親の反原発運動を支えるため兄は京都大大学院で地震学を、弟は大阪大で物理学を学んでいた。それからは、いつ死のうかと想う日々が続いた。死を現実のものとして捉えられないから涙も出ない。以来、世界を放浪する歳月でした。2011年の「3・11」時、テレビで原発事故をみて、初めて滂沱の涙を流した。原発の危険性を訴えていた夫の存在が迫ってきた。水戸さんは今改めて語る。「さまざまな運動のエポックになったのが山崎君の死。近年の特定秘密保護法や「共謀罪」法などの成立過程を捉えていると暗黒時代に突入していく時に似た不穏な空気を感ずる。彼の死は、戦争や平和、自由な表現、個人と集団のありようを考える礎なのです」

次回12月26日

10・8羽田闘争と山崎博昭の死

50年前の1967年10月8日、ベトナム反戦デモに参加していた京都大学文学部1年、山崎博昭さん（当時18歳）が、羽田空港近くの弁天橋で機動隊と衝突し命を落とした。いわゆる「第1次羽田闘争」の中での出来事だった。今夏から秋にかけて、大阪や東京で彼の死や闘争の意味を見つめ直す集会在開かれた。企画したのは「10・8 山崎博昭プロジェクト」。この時代に青春を送り闘争に関わった人たちの胸底にうずくまるものとは。プロジェクト発起人の一人で反原発運動にも奔走する水戸喜世子さん（82）＝大阪府高槻市＝は「彼の死の意味、反戦・平和運動のあり方を絶えず自問している」と語るのだ。【有本忠浩】

ベトナム反戦デモの「第1次羽田闘争」や、闘争に参加し18歳の命を奪われた山崎博昭さんについて語る水戸喜世子さん＝大阪府高槻市で、有本忠浩撮影



技術者から記者へ 私の転機



一般社団法人
大阪自由大学理
事長でジャーナ
リスト、池田知
隆さん(68)＝写
真＝も『10・8ショック』が人生の分かれ道だった」と語る。熊本出身。18歳時に福岡県大牟田市の国立有明高専(5年制)

鋭く、すごい人間が同世代にいると描きだされた。そして、「彼の死から私は変わりだした」と言い切ってもいい。その年(67年)の冬、パスポートを取り、1週間ほど沖縄を巡った。「いつしか技術者の道から外れ新聞記者を目指す」と新聞社を退職後、大阪市内で

大阪自由大学理事長・ジャーナリスト 池田知隆さん

の4年。秋には学生会長になった。「高専で学ぶうち産業界の要請による人間ロボットの生産工場ではないか、と学校や社会への疑問を募らせた」そんな時だった。国語の恩師(故・棚町知弥さん)が、「山崎博昭君の日記」を掲載した週刊誌の記事を抜き書きしたガリ版刷りを配布。「彼がデモに参加する時に持っていたマルクス、キルケゴールらの書名に圧倒された。社会に向ける目線も

2012年から大阪自由大学の企画運営に携わる。多彩な公開講座(文学、芸能、映画)など社会問題を考える場作りに尽くす。今年中に恩師の評伝を書く予定。山崎プロジェクトの3事業にも全て関わり今夏のベトナム行きにも参加。「彼の死の意味をどう受け継ぐか。自分の中で真摯に純粋に守るべきものを守るといふ信念だけは忘れないでいたい」と語る。

ベトナム反戦デモ 学生が犠牲に



「第1次羽田闘争」は、ベトナム戦争が終る中で佐藤栄作首相が羽田空港から南ベトナム(ベトナム共和国)へ向

水戸さんは、お茶の水女子大で物理学を学んでいた頃、東京大大学院1年で放射線物理学を学んでいた。歳さんと出会ったのは1960年に結婚。関西に移住し、夫は甲南大の物理学の専任講師、喜世子さんは京都大基礎物理学研究所で所長だったノーベル物理学賞受賞者、湯川秀樹博士の秘書を務めた。「博士は長女の誕生の名付け親。『水晶』のような無垢な輝きを、と願って

不穏な時代ただす礎

かつてを学生らが阻止しようとした運動だ。学生に圧倒的な人気を誇った作家、高橋

ださったと懐かしむ。夫婦はその後、日韓基本条約反対闘争、ベトナム反戦運動、沖縄・安保闘争などに携わり、歳さんは70年代からの反原発運動の理論的支柱でもあった。



今年6月、東京都大田区の福泉寺に建立された山崎さんの墓。10・8山崎博昭プロジェクト提供

を展示③追悼記念本『かつて10・8羽田闘争があった』(台同フォレスト)の刊行。いずれも今年発売された。追悼記念本には彼の死の検証記事に加え、高校の同窓会で元東大共闘議長・科学史家の山本義隆さん、同高の同期で詩人の佐々木幹郎さんら11人の寄稿を掲載。時代の貴重な証言記録になっている。

2人は、山崎さんらデモや集会その犠牲者らを物心面面で支える「羽田救援会」を67年に設立(現在は「救援連絡センター」)。東京都港区に改組し、水戸さんが初代事務局長に。「手弁当で運動や

プロジェクト呼びかけ人の

支援に忙殺される日々だった生活が暗転したのが86年12月。歳さんと、長女の二つ下だった双子の兄弟(兄・共生さん、弟・徹さん)が24歳の若さで白血病に倒れた。兄弟は、両親の反原発運動を支えるため兄は京都大大学院で地震学を、弟は大阪大で物理学を学んでいた。それからは、いつ死のうかと思っ日々が過ぎた。死を現実のものとして捉えられないから涙も出ない。以来、世界を放浪する歳月でした。2011年の「3・11」時、テレビで原発事故をみて、初めて滂沱の涙を流した。原発の危険性を訴えていた夫の存在が迫ってきた。

水戸さんは今改めて語る。「さまざまな運動のエポックになったのが山崎君の死。近年の特定秘密保護法や「共謀罪」法などの成立過程を見ていくと暗黒時代に突入していく時に似た不穏な空気を感ずる。彼の死は、戦争や平和、自由な表現、個人と集団のありようを考える礎なのです」

「次回は12月26日